Color Science Association of Japan

16世紀後半から17世紀前半のイングランドに見られる黒色の概念の変容

The Modification of Conception around Black Colour in Late Sixteenth to Early Seventeenth Century England

日高　杏子　　東京芸術大学大学院　　Kyoko Hidaka

1. はじめに　―豪奢から簡素へ―

本発表では、16世紀後半から17世紀前半イングランドにおける黒色の示した意味を、色彩文化史の視点から分析する。目的は、黒色がスペインに発する流行の発端、豪華さを象徴していた盛期の時代から、簡素を示す色彩へと変遷した思想的背景の経緯を明らかにすることにある。染織品において、黒の持つ意味が、宗教、社会経済的変化によってどのように影響されたのだろうか？その歴史的背景から、肖像画と刺繍の施された染織品を事例として提出する。はじめに黒が豪華さの象徴だった理由、次に簡素さを表現するようになったと考えられる状況の変移について考察を加える。

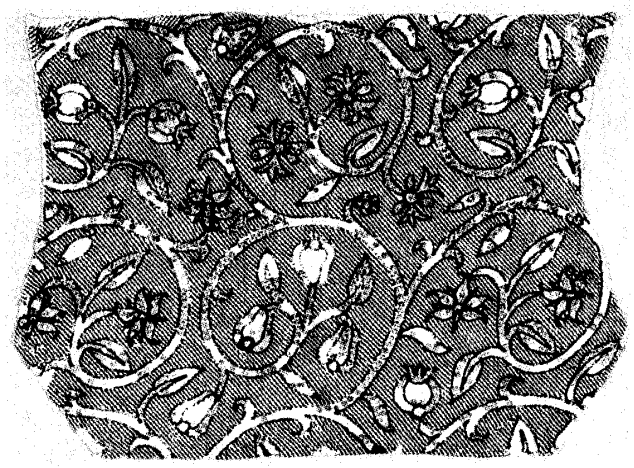
2. スペイン文化の隆盛と黒

16世紀は、大航海時代としてスペイン・ポルトガル王国が最も強大な国家の一つであった時代である。その影響下で西ヨーロッパ全域にスペイン風様式が流行した。ルネサンス運動自体にすら、古典文化の復興のみならず、アラブ文化の受容という要素が認められた。アラブ文化との密接な融合でスペイン文化は、時代の最先端の代名詞だった。一方、16世紀始めの宗教改革に対する反撥として、反宗教改革運動がスペインで盛んになった。その先鋒の一つはイエズス会[1]であり、彼らの祭服は黒色だった。

当時イングランドでは、キャサリン・オブ・アラゴンの娘メアリー世がイングランド女王に即位した。この時代、メアリー世はプロテスタント教徒を迫害し、イングランドを全てローマ・カトリック的、スペイン的に統一しようと企てた。

16世紀後半に多く制作されたブラック・ワーク、スパニッシュ・ワークと呼ばれる、白の上に黒の糸を主に用いた無彩色の刺繍の作品群が存在する。[2]（図・1　参照）刺繍の形態と図像は、有彩色の刺繍を施したものとさほど差はないが、最も顕著な特徴は色彩的切り替えである。

図・1　ブラックワークの施された女性用頭巾
1600年から1630年頃　22.5cm　×　31cm
グラスゴー・バレルコレクション所蔵



黒色(正確には濃い褐色茶)の染色のために檳榔子(betel palm)は用いられていたが、インド・マレーシア原産で、それらの土地からの輸入品のために、一般的に高価な染料となっていた。

3. イングランドの宗教改革と黒

メアリー世の死後、王位を継承したエリザベス一世が、英国国教会を国教とし、再びイングランドをプロテスタント化した。また1588年、イングランド海軍が無敵艦隊と称されたスペイン海軍を打ち破り、エリザベス治世下のイングランドは、スペインの文化的属国ではないことを顕示し始めた。ナショナリズムといえるイングランド独自の文化主張をして、それまでローマ・カトリックが独占消費していた金色を、イングランドでは国王と貴族達が大量消費し始めた。[3]またそれと逆行するように、商業同盟国オランダの影響で、宗教改革と共に簡素さを至上とする清教徒の色彩消費としての黒色が挙げられる。イングランド国教徒の表象におけるローマ・カトリック偏向に反撥していたプロテスタント清教徒達は、国王と貴族に批判的だった。ジェームス一世は、イングランド王であると同時に、カルバン主義の根強いスコットランド王[4]として、彼の清

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

教徒に対する姿勢は、いくぶん擁護的だった。ゆえに、清教徒の議会での王室政治に対する反撥はさほど大きくはならなかった。

だが次のチャールズ一世は、贅沢を極めたことで知られた寵臣バッキンガム伯爵と、カンタベリー大司教ロードが背後から、政治的助言を与えて豪華な生活を薦めていた。[5]イングランド国教会はロードの方針で、国教会のローマ化をさらに推し進め、豪華な典礼を奨励した。[6]そして、チャールズ一世は美術の擁護者という美名のもとに、父ジェームス一世の治世に輪をかけた贅沢を行い、宮廷演劇や美術がそれに伴って発展した。チャールズ一世は、そのような独裁に反撥する議会の召集を 11 年間にわたって止め、彼らの意見を無視している。極端に装飾を罪とみなす清教徒達によって、金を打ち消す色彩として黒が多用された。

先に述べたとおり、黒に繊維を染めるということは 16 世紀まで高価であった。しかし、新大陸で発見されたログウッド(logwood)染料[7]によって、安価に黒色が出せるようになり、黒色の染織品がイングランドの庶民レベルにも普及することとなった。この染料は安価ではあったが、退色しやすいという欠点があり、ベルベットなどの高級な繊維には適さなかった。

4. 考察

当時代、イングランドにおいて、黒色が簡素さの表現となった二要因は、スペイン文化に対する反撥感情と新大陸からの黒染料の価格・品質低下であると思われる。さらに清教徒達は、金・銀のような金属色を支持するイングランド国教徒に対し、それらを否定する意味で黒色を用いたと考えられる。

5. まとめ

一般に豪華絢爛さ、高いステータスを直接的に表現する金・銀のような金属色と比べ、黒色が示唆する意味はより多元的である。この時代、イングランドにおける黒が象徴する意味は豪奢さから、簡素さと敬虔さへと多義化した。その採択の志向的推移は、イングランドにおける宗教改革の影響と清教徒革命にいたる経過と平行している。その理由として想定できるのは、16 世紀後半から 17 世紀の染料の暴落、国王および国教徒であり、体制側である貴族達の金・銀を中心とした無制限に贅沢な表象に対する抑制だったであろう。

参考文献

GOSTELOW, Mary: Blackwork, New York: Dover Publications, 1976.

Byington, Ezra Hoyt: The Puritan in England and New England, New York, Lenox Hill Pub., 1972.（原著は1900年に初版）

日高杏子：論文「17世紀初頭ロンドンの金糸銀糸に見る色彩の消費」、日本色彩学会誌、volume24, Number 1, p.10-17, 2000.

日高杏子：研究発表「色彩の消費　―17世紀初頭ロンドンにおける金糸銀糸による地位表象―」、日本色彩学会誌、volume23, Supplement, p.78-79, 1999.

関連事項年表

1553(-1558)	メアリー世即位 イングランドがカトリックに復帰 プロテスタントに対する迫害
1558(-1603)	エリザベス一世即位 イギリス国教会化（絶対主義国家成立）
1588	スペイン無敵艦隊を破る
1600	イングランド東インド会社設立
1602	オランダ東インド会社設立
1603(-1625)	ジェームス一世即位
1611	欽定訳（ジェームス王訳）聖書出版
1621	議会大抗議
1625(-1649)	チャールズ一世即位
1629-1640	チャールズ一世による無議会政治
1642-49	清教徒革命
1647	チャールズ一世がカリスブルック城に投獄される
1649	チャールズ一世の処刑

---

[1] Societas Jesu
1534 年にフランシスコ・ザビエルらが結成したカトリック男子修道会。

[2] GOSTELOW, Mary, p.9, 1976.

[3] 日高, p.78-79, 1999.

[4] ジャン・カルバン（1509-1564）はジュネーブを中心に活躍したフランス人プロテスタントの神学者・宗教改革者。スコットランドでは、長老派教会がカルバン主義の教会として主流であった。

[5] Byington, Ezra Hoyt, p. 59, 1972.

[6] Ibid., p.66, 1972.

[7] Haematoxylon campechianum
ヘマトキシロンボクより採れるヘマトキシリン。中米・西インド諸島で生育する。
ログウッド・ブルーと呼ばれる染料は、Condalia obovata という植物からのもので、しばしば混同される。

NII-Electronic Library Service